

## こどもの未来対策特別委員会 意見交換会報告

こどもの未来対策特別委員会では、子供の不登校・ひきこもりの現状や支援団体等が抱える課題についての理解を深めるため、当事者及び関係団体と意見交換会を行いました。

### 1 開催日

令和6年9月2日（月）

### 2 会場

①一般社団法人なかのま「ひとのま」 10:00～11:30

子どもと若者のための学園。不登校・引きこもり・就業困難など、様々な理由で困難を抱える子どもと若者をサポートされている。

②一般社団法人Ponteとやま「みやの森カフェ」 12:00～14:30頃

通常のカフェに加えて、不登校の子供たちの新たな居場所として、カフェの隣の空き家を活用したフリースクール（名称「フリースタイルスクール」）を運営している。

### 3 参加者

県議会側

こどもの未来対策特別委員長	武田 慎一
副委員長	山崎 宗良
委員	佐藤 則寿
〃	光澤 智樹
〃	寺口 智之
〃	瀧田 孝吉
〃	庄司 昌弘（②のみ参加）
〃	大門 良輔
〃	種部 恭子
〃	奥野 詠子
〃	火爪 弘子
〃	宮本 光明（①のみ参加）

相手側

①一般社団法人なかのま（計3人）

- ・なかのま代表理事 1名
- ・当事者の若者 2名

②一般社団法人Ponteとやま（計9人）

- ・Ponteとやま代表 1名
- ・Ponteとやま理事 2名
- ・フリースクールスタッフの若者（計6名、途中入れ替わりあり）

## 5 意見交換の概要

### ①一般社団法人なかのま「ひとのま」

委員： 学校に行けなくなった後、このようなフリースクールに通うことになって心が救われた部分もあると思う。その部分についてお聞かせ願いたい。

参加者： 不登校になって、約1か月後に「ひとのま」に来た。同じ小学校に通っていた同級生のお母さんの紹介もあって、母が連れてきてくれた。いろんなコミュニティハウスを回ったが、「ひとのま」には、年の近い人もいたこともあって通うようになった。

ここに連れてきてくれて、結果いろんな人に会えたので母には感謝している。

代表： いろんな場所があっというと思うが、私らは、学校の代わりにこれを学ばせようとか思っていない。

学校に対する不信や周りの大人は聞いてくれない、言ったところで無駄だという不信感、無力感を払拭できればいいなということに力点を置いている。だからここでは、あれしましょう、これしましょうと言うことはなくて、好きなことをやりましょうとして、まず信頼してもらえよう関係を作るところから始めている。そうすると、子供たちのほうから、あれやりたい、これやりたいと言ってくるようになる。そして中学2、3年生になると、みんな自分の人生を考えるようになって、自分から勉強を始め、進路希望も見えてくる。

その土台を作るために、「ひとのま」は活動しているが、外から見ると、あそこは何もやらせていないと見られることもあり、そこが運営するうえで難しいところ。

参加者： 議員の皆さんは、私たち不登校となっている人を見て、どう思われているのか。

委員： 自分の子供も今度小学校に入学だが、子供自身がどうして学校に行くか、勉強するかを理解することが大事だと思う。

学校は楽しいところであればいいと思っているので、どうしたらよいか皆さんの話を聞きたい。

委員： 長年議員をしていて、学校に通えていない子も見てきたが、引っ越しなどでその後がわからなくなることもあった。

スクールソーシャルワーカーも昔と比べて増えてきているが、そういう子に関係機関につなぐことができない事例が増えているそう。それで不登校の子の数も増えてきている感じもする。

冒頭のあいさつの中で、学校の暴力の話があったが、副担任はいないのか。

代表： 副担任は必ず存在しているが、現場では見守るチェック機能が充分には働いていないのではないかと思う。先生数が少なくなっており、そこまで手が回らないのが現状だと思う。

それと、いろんな学校の先生と話をしている、密室ということが原因とし

てであると強く感じる。

委員： 私の周りにも学校に行っていない子がたくさんいる。そういう子は、感性豊かだったり敏感な子が多いと感じる。昔は我慢しろと言われる時代だったが、今は不登校へちゃんと行動を移せる時代になったから、それはいいことだと思う。それも多様性の一つだと思う。

「ひとのま」にくる子や相談に来るお母さんの様子から、学校に問題があることがわかる時、学校に連絡して、けんかするほうか。

代表： けんかしてもよくなることはないので、けんかはしない。話し合いはきちんとする。

不登校になる場合、家庭VS学校になってることも結構あって、私が間に入って学校がおかしいという時もあるが、もう少し柔らかく、家庭はこう感じているが、学校の考えを教えてもらえないか、とするときもある。家庭側の思いが学校側に伝わっていないという場合も結構あって、ただ不信感が入ってしまっているの、間に入って伝えておきますよ、とよくやっている。

家庭側の味方も学校側の味方もしたいと思っている。そうしないと割を食うのは子供なので、学校とけんかしている場合ではないと思っている。

委員： 「ひとのま」で友達と何をしているのが楽しいか、教えてほしい。

参加者： 同じくらいの年代の子とゲームをするのが楽しい。

委員： 将来的に不安を感じている部分を教えてほしい。もっとこうなればいいなとか、自分が何かしたいことがあるうえで、これが引っ掛かっているということがあれば教えてほしい。

参加者： 将来どんな仕事につけばいいか不安がある。どういったものに自分があっているか、続けられるのか、そのあたり不安に思っている。

委員： 「ひとのま」から出てその先への進路について世代ごとの進路指導やサポートは行っているのか。

代表： 小学生については、いろんな人と関わるのがまず大事なので、家ではなくて外に出てきておいでよということを重視する。

中学生については、みんな進路の心配をし始める。中学までは義務教育で自動的に上がれるけれども、高校は受験もある。このあたりは保護者に情報が必要で、公立とか私立とか高校の話はできるようにしている。今は通信制高校もあるので、それも選択肢の一つとして提案することもある。

保護者や本人も高校卒業資格にこだわるケースがあって、安心が必要だと思うので、そこまでは得られるようにサポートはしている。

ただ、一番大事なのは、子供もそうだが最近は大人もこう働かなくてはいけないと思ってつぶれて自殺される方もいる中で、そうじゃない生き方もあるよというのをわかってもらいたいということ。周りはいろいろ言うかもしれないけれども、そうじゃなくても生きていけるぞということも教えてあげたい。



↑ ↓ 一般社団法人なかのまの皆さんとの意見交換の様子



## ②一般社団法人Ponteとやま

委員： 代表始めスタッフの皆さんはフリースクールなどで子供たちと一緒に過ごしていると思うが、その子たちにどうなってほしいと思っているか。

参加者： みんなとても元気だ。土台が大切だと思う。

失敗したのも楽しかったのも全部自分で、自分は自分のままでいいんだと思ってもらえる環境をつくって、子供たちにはどんどん元気に大きくなってもらえたらいいと思っている。

子供に叱ったり、怒ったりすることもあるが、子供たちは翌日には何事もなかったように来るので、そこは信頼関係があつてのびのびとできていると思う。自分ものびのびさせてもらっている。

理事： 空き家だったこの場所を去年から借りて、上の階ではシェアハウスを始めている。このスタッフ3人もこちらのシェアハウスで暮らしているが、町内費も出して、地域行事にも参加するようになった。

自分は自治会長もやっているが、子供夏祭りで、このシェアハウスと連携していろいろやりたいと言ってくれる人もいて、地元の小学生や中学生もここにきて、みんなと交流している。

小・中学校にも講師として呼ばれて、ここの話をさせてもらったり、行政の方が何回か見学に来られて、早い時期から、ここに来る子について出席扱いにしてもらうなど、地区外の子もいるが、先生方には理解いただいていると思う。

代表： 学校とここを往復する子もいる。自分で学ぶ場所を選択していけるのもいいのかなと思っている。

委員： ここにきている方のいきさつはどのようなものか。やはりカフェが中心で、そこから就労にもつながっているのか。

理事： ほとんどが相談に来られて、それでは掃除のお仕事やってみますかという流れである。

何かあったらカフェなどに相談に来てみようといったように、上手に使ってくれていると思う。

委員： 皆さん社会などで何かあっても、ここが安心できる場所としてあるから、また戻ってこられるということだと思った。

理事： そのとおり。ここのスタッフはここを家として選択した人たちだ。ここに住んでいるから仕事が続いているということもある。

委員： 一般社団法人として、様々な事業を行っておられるが、会計は1つにまとめているのか。採算は取れているのか。

代表： 掃除の委託で採算は取れている。カフェは多少赤字だ。少し前までは、ここまで子供の数は多くなかった。

理事： 毎日働くことが、当たり前ではない、ハードルが高いと感じる若者もいる。今は特養掃除の委託など頂いているが、職場の開拓はしていかなければいけないと感じている。

市役所では就労支援は興味を持ってもらえない。

例えば、病院で車いす掃除をしているが、賃金は出しておらずボランティアとして行っている。福祉会から地域貢献ということで、働いた分のお金は出ているが、これも制約がいろいろあって結構限界である。

そのこのところ県や市の助成があれば病院側も私たち側にもいいと思う。

農福連携については助成金がいろいろ出ていると思うが、我々みたいなところにもそういったものがあれば、事業として成り立つと思う。

代 表： ひきこもりの人たちも働きたいと思っている。ただ、その機会を与えてもらえない。

発達障害の傾向のある人たちは、同じことをするのが苦手で、福祉の現場で周りのみんながただサポートするだけではやっていけない。ただ能力がある人が多い。少し研修をしてすぐ現場にだされるのも、無理な人が多い。

何か失敗したときに、一緒に原因を考えたり、次どうしようかと工夫することのサポートが大事だと思う。

委 員： ここは皆さんにとってなくてはならない場所だと思うが、将来の見通しはどう考えているか。

代 表： 施設自体の持続についてはあまり考えていない。

市や県が頑張ると言ってくれているので、安定性があればもう少し続くと思う。

参 加 者： ここがなくなると本当に困る。

委 員： 県や市に何をしてほしいか。

代 表： やはり金銭的な補助が必要だ。

委 員： 使い勝手のいい助成金とは例えばどのようなものだと考えているか。

代 表： 例えば学童保育所の補助金、子供の居場所を開いたらでる補助金だが、射水市は9か所そういう居場所が開かれているが、砺波市はゼロである。何度も市に補助金の話をしに行っているがなかなか通らない。

子育て広場事業は、県ではほとんど子育て支援センターに予算がついているらしいが、民間の良さもある。曜日や時間に縛られず気軽に行けるということもあるので、ぜひやらせてもらえたらなと思っている。

新しく何かを作るのではなくて、もともとあるところに民間委託ということも考えてもらえたらありがたい。

委 員： 今の話は、事業支援のような形で、施設の借賃に払ってもいいし、人件費に払ってもいい。そういった補助金の話か。

代 表： そうである。

委 員： 子供たちと触れ合っている中で、今後の富山県はどうなってほしいと感じているか。

参 加 者： 子供を主とした取組が必要だと思う。今度子連れのお母さんもカフェにきていいよとする話を聞いていると、子供中心とiiつつ、やはりサポー

トが足りていない現状はあると思う。私は20代だが、下の世代の子を大事にしていく取り組みは必要だと思う。



↑ 一般社団法人Ponteとやまの皆さんとの意見交換の様子



↑ 一般社団法人Ponteとやまの皆さんと記念撮影